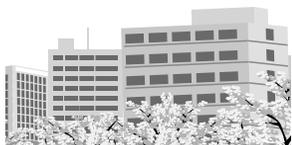


## 会員の広場



### 「日本橋川・神田川」から江戸を見る

古川 統彦（東京）

梅雨の晴れ間の土曜日、日本橋・南詰めの船着場から「日本橋川・神田川」を時計回りで周航し、隅田川を経て日本橋に戻るクルーズを楽しんだ。

〔日本橋川〕 出発点の「日本橋」は架橋100周年を前にした平成23年、ドイツ・ケルヒ

ヤー社による「橋洗い」で、橋の裏側も綺麗になった。「二石橋・常盤橋」、東洋経済新報社・経済倶楽部の側を航行する気分はまた格別。修復工事中の「常磐橋」を限界ギリギリで抜けるとそこは常盤橋公園。船から眺める石垣は見事である。

重厚な「J.Rの橋」、橋桁に旧国鉄の紋章が残る。「一ツ橋」から「雉子橋」へ。左岸に江戸城外堀の石垣が見える。その石垣には天下普請の際、接する他家の石と区別するため、石工の彫った印が見られるという。「組板橋」は橋にそりがなく、まな板のようにも見えた。「堀留橋」右岸に来ると、河川を浄化するEM菌（有用微生物群）を試験的に放流する場所が目に入った。

首都高の円柱の橋脚は、回廊のように水面に映り、分岐を繰返しながら、川を覆ってきたが、新三崎橋付近で左へ離れていった。

〔神田川〕三崎橋を過ぎると、神田川との分水点となり、「後楽橋・水道橋・御茶の水橋」と続く。水道橋から御茶ノ水にいたる急峻な渓谷は天下普請で仙台藩が水路工事を施工し、神田山を切り崩した土で、日本橋・京橋方面を埋め立てたという。建設機械のないこの時代の工事は、想像を絶する。御茶ノ水付近の渓谷は「茗溪」（「茗」は茶の意）とも呼ばれる景勝。「聖橋」は優美で水面から高い。左は湯島聖堂。万世橋駅跡、秋葉原の「J.R橋」を過ぎる。この5つの橋を経ると、神田川が隅田川に注ぎ、最終橋梁の「柳橋」とな

る。係留されている屋形船に江戸情緒を感じる。

〔亀島川から再び日本橋川へ〕隅田川から水門を介し亀島川に入る。ここも5つの橋が架かり、わずか1kmの川であるが、江戸時代は日本橋川とともに栄えたという。水門を介して日本橋川に入る。ほどなく首都高が川を覆う。左岸にJ.P.X・東京証券取引所と兜神社。間もなく船は「日本橋」に帰着した。

一昔前であれば、汚染した日本橋川のクルーズなど考えられなかったが、今は日本橋を起点として賑わっている。光の入る水辺やコンクリートの殺風景な護岸のテラス化など、日本橋川が親水の場所となるよう、今後とも整備されていくことが望まれる。